



ニレンゼン河（及び前正覚山）

ニレンゼン河

ブツダガヤから田の畦を通り緑の大野を縫うて数哩。幽翠な前正覚山が平和に神秘的な色を漂わして、いかにも世尊ましまししその世の昔を語るごときニレンゼン河に出でられた。ひろびろとした緑の沃野をゆるやかにうねって銀鱗を烈日に刻む河の水が、三千年をくり返して昼夜をすてず流れきたり流れ去る。その水の色のみ鮮やかにして、ひとり仏法は世尊のみくに今は空し。

「ニレンゼン河の水を見て

「我法はなぞかくばかりなりにけむ、尼連禪河のながれつきせで」

「牧牛女」

「きゝしよりそなたに君を恋しけれ我がさかむにつかうみさほを」

尼連禪河のほとりに立ちて、まし／＼し世の世尊をおもふ懷古の情に、輝く世尊の御一生がしみ／＼慕はれる。

ヒマラヤ山頂万古の雪が夕日に映ゆる北インド、カピラバストウ城の王子たりし世尊が、求道の志もだしがたく、ついに親と位と妻と子とを捨てて家を出で、初めバカバ師を訪いしもその教え取るに足らずしてこれを辞去し、あとより追いきたりし父王の使者をかせし、使者の命により常随修行のため出家せし五人の若い侍従とともに、ガンジス河を渡つてその東南王舎城を経過し、さらにその西南尼連禪河を渡り、去つて三百の弟子を有するアーラーラ、カーラーマ師を訪いしも満足せず、さらに當時文化の中心地マカダ国王舎城の附近に一教団を統率せしウドラカ、ラーマプトラ師について学と行を積み、非想非々想という禪定の最高心境を得給いしも満足せずして、数ヶ月にしてその許を辞し給い、さらに王舎城よりは三、四里、ニレンゼン河よりも東に程遠からぬ、前正覚山の林中、當時の修行者のよく修行地とせし所を中心に、苦行をつむくと六ヶ年の久しきにわたり給いて深く感ずるところあり、大心光明の実現にまたざれば徒らに苦行をつむも成道の難きをさと給い、皮骨連立の瘦軀をニレンゼン河に浴し給いしに、体力つきて一命も危き所を辛う

じて樹枝につかまつて岸に上り給い、折柄通りかかりし牧牛の娘ナンダバーラの牛乳の供養をうけて精力を回復し給い、前正覚山に登り給いしも所宣しからず、ニレンゼン河を渡つて伽耶のビツバラ樹（菩提樹）の下に端坐して無上深三昧に入り給うこと数十日、一切の煩惱を断ちつくし、一切の智徳を輝きあらわして、無上正等正覺を成就し給い、無量光無量寿のアミダを實現したる如来となり給う。

入定幾日の内証に表現せし華藏莊嚴の淨土に自受用の法樂を専らにし給いし後、重々無尽の海印三昧の坐を立ちて、まずかつて教えを受けしアーラウ、ウドラカの二師にこの正覺の大法を伝えんとして趣き給いしも、二師ともすでに死して世に在らず、かつて宮中の侍従たり、のち六年同行たり、今そむき去りし阿若憍陳如等の五比丘を度せんとして、ガンジス河を渡つて鹿野苑にいたり給い、苦行をつづけている五比丘に苦樂の二辺を離れし中道を教え、四諦の法門を説き給う。この附近にて五比丘の外、多くの帰依者を導き給い、転じてマカダ国に向い給う途上、ニレンゼン河河畔に苦行せるかつて邂逅の縁深きウルピンラと、ナダイと、ガヤの三迦葉を濟度し給い、若き世尊がこれらのすでに世の尊崇せる当時の大宗敎家を弟子としてしたがえ給えるに、世の視聴を集めつつ、当時新思想界の中心地マカダ国都王舎城に入り給い、頻婆娑羅王を導き給うに、王深く帰依して竹林精舎を献す。次いで王舎城に名だたる智徳兼備の婆羅門の大慈善家ですでに思想界の權威たりし大迦葉や、また各百人の弟子を有する舍利弗、目連等すでに敎界の明星たりし人を弟子となし給い、仏弟子一千二百五十人を数うるにいたる。それから王舎城舍衛城等の間に遊化し給うこと数年、たまたま王舎城に程遠からぬ靈鷲山にて説法中、父王の病を知り給い、急ぎ故郷を訪い給うに、待ちこがれし父王をはじめ、母君マハマヤ夫人が御里方ルンビ二苑で世尊を産み、七日目にはこの世を去り給いし亡きあとの世尊を慈しみ育て下されし叔母君波闍婆提夫人、かつての若き妃の君たりし耶輸陀羅夫人、

一子ラフラ王子を済度し給い、三月後に父王逝去のお葬いを終つて再び王舎城に趣き給う。その教団には四姓の社会階級の跡を絶つ。

文武盛んなコーサラ国舎衛城では祇園精舎を献ぜし須達長者のみならず、国王を始め帰入者多く、その後王舎城、舎衛城はもちろん、バーラナシーやベイシャリの重閣講堂を中心に、これらの地方を往復して衆生を済度し給うに、やがて迫害も加わつたが、いかなる境遇にも麗わしき色をかせ給わず、ことごとく済度の縁となし給う。ご成道三十七年目には王舎城の繁華な町にあまり遠からぬ美しい谷々を見晴らす五山の中の最高峰靈鷲山にて、おそらく法華ご説法のなかば、王城でアジャセ太子に起された悲劇が縁となりて、その母君のために觀無量寿経の念仏三昧のご説法となり、靈鷲山における無量寿経のご説法と、舎衛の都の祇園精舎における阿弥陀経のご説法とあい伴つて、末代万年の後までも凡夫成仏の光となるにいたつた。

かくて八十歳の御年にいたりガンジス河を渡つて北に向わせられたが、ご生国は舎衛王子のために亡ぼされ、今は舍利弗、目連等の大弟子もこの世に亡く、ベイシャリ城外に憩ろなご説法を賜わりて翌日、クシナガラにおもむき給う途中、重患にかからせられ背痛はなはだしく、車輪をつくろい、つくろい進むような旅をつづけられるうち、金工純陀の供養にあたつて下痢出血したままに、いたいたい老のみくろを運ばせられたが、辛うじてバティ河に渴きをいやし浴を取り、サーラ国に達して入滅いよいよ近づき給いし時にあつて、老翁スバツダが教を請うを、常侍の阿難尊者が御悩みを察してさえぎらんとせしを、わざわざお呼びよせになつて懇々と導いてついにさとりを開かしめ給い、河畔に繋る二またの沙羅の木陰に世寿八十年のみくろをよこたえ給い、銀月淡く蒼空にかかる中夜寂然として声なく、無余涅槃に雲かくれて無量寿光の都に応化のあとをおさめ給う。

初 転 法 輪 地

ガヤには先にカルカタで歓待をうけしビルマ王の山荘があつて、そこで大量のインド食の供養をうけ、一夜を明してガヤを去り、汽車でベナレス市におもむき、古風なインド式のこの町から、さらに馬車で川を渡り、小鳥のどかに囀る静な林をぬうて、今はただ悲しい廃墟の鹿野苑ろくやおんに着かれた。

「きゝもせぬ見もせぬ日より恋しける、鹿野のそのうに鳴く鹿の声」

仰げば小高い丘に六角塔がある。これぞ世尊がガヤで成道し給いし自受用三昧の坐をたちて威儀寂靜として歩みをここに移し給いし時、かつて王城内の侍従であり、次に苦行林の同行であり、さらに背き去りてここに苦行を続けし阿若憍陳如等の五比丘が、かれらを済度にきたり給いし世尊を迎えて、まずその威儀にうたれて憍慢の角を折り、直ちに帰依したるみあとを記念に阿育王がたてられし迎仏塔（一度回教徒に破壊されし礎の上に、後年アクバル大帝が戦勝記念に建てし塔）がある。

それより平坦な路を少し行くと荒れに荒れし一面の廃墟。これぞ世尊の初転法輪所。記念の

法輪塔前にぬかづき、合掌頂礼、一心に念ずらく

「遮那珍しやなちん〇（一字不明、御みの字に見ゆ）の妙衣みょういを自証菩提の道場にかくし。

応機丈六の弊衲を波ら奈鹿苑にしめし

象歩の威儀寂靜として神光晃

曜

眉間白毫玉の彩あり身相円に

して紫金色

威徳巍々として物を動す 濟

度五比丘

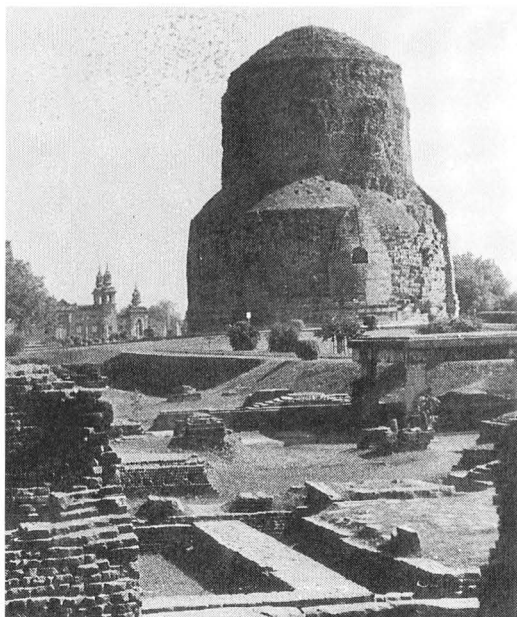
即ち初転法輪處、故我今一

心敬礼」

伽藍のあとと思しきものはあれ

ど、それより外には昔をしのぶよ

すがもなく、二千歳の風雨に虫ば



鹿野苑初転法輪地（ダーメーク大塔）



法輪塔

まれしこの初転法輪のゆかりの地には、心耳に伝わる四諦の響のみが、野ずえの風に、思い出
の夢を追うて薄がすれる。

「いにしえの鹿野のそのうに訪いければなくねもなくてあとぞかなしき」

「世を秋のもみちの葉さえちりはてし鹿野のそのうに鳴くねかなしき」

「かなしさにおのがなくねをのみぞきく鹿野の苑生^{そのう}のみあとといつゝ」

「みあとなる鹿野のそのうはあれはてゝ見るさえ今はかなしかりけり」

入 涅槃 地

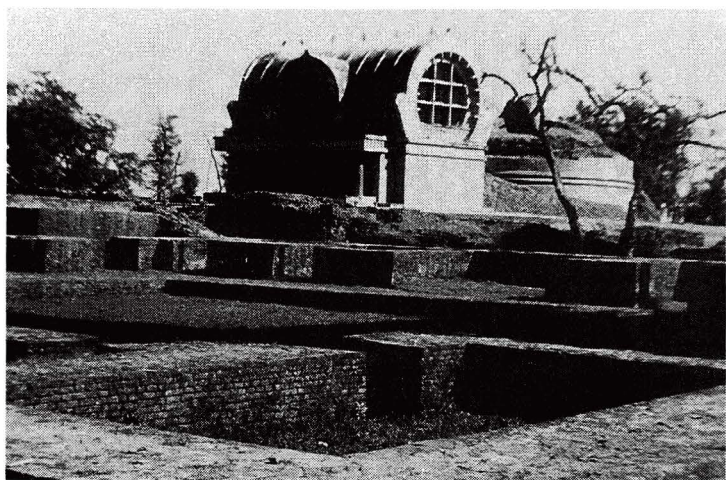
次には仏入涅槃地なるクシナガラに参詣された。落ち葉の小みちをはさんだ雑木林は、武蔵野でも思い出させる淋しい風情。田の畔を通つて向うに小高い円い丘陵に、鬱蒼たる木立ちの一群、そこぞそのかみ茶毘の煙の立ちしところ。

小高い所に丈夫な建物があつて、その小暗い中に安置された仏涅槃像に一心に敬礼し奉る。

「あとを見て我あくがるゝ浜千鳥、鳴く一声をきくよしもがな」

と慈悲徹愀のご遺訓を念ずれば、恒沙福智皆円満の世尊、入滅の恩容髣髴として、ひれ伏す頭上の枝に葉渡る風の音が淋しく追慕の涙を新たにそそる。

想いおこす、中夜寂然として声なく万象悲曲に息つまる時、二またの沙羅の木かげに仏世尊が衆生済度の旅路に病まれし老のみくろをよこたえて、最後の遺教を末代かけてしみじみと、「なんだち比丘」と呼びかけたまう常住の世尊の念劫融即に響くみ声を心耳にうけたまわれれば、身を粉にし骨をくだきても、世尊の法城を嚴護して、その遺法を弘通せんと、大恩教主の広大慈愍にふるい立ち、



入涅槃堂（クシナガラ）

「世をてらす法の灯火かゝげつゝたゞながれといのるなりけり」

バティ河は今は跡かたもなく、畑や田や続いた茫漠たる野ずえに、人を恐れぬ小鳥やけものが遊んでいる平和な木々の間を抜けて、丘の森に塔影を拝し、惜しき別れをこのあくがれの聖地に告げられた。

祇園精舎

汽車の窓から遙かの右に連なるヒマラヤの銀嶺をながめて、ハシノク王が世尊に仕えたコーサラ国の跡とおぼしき地を過ぎて、駅に下車、菩提樹や椰子や棕櫚の森が昔をしのばする路を通つて、低い灌木の間に古瓦のごときものがゴ

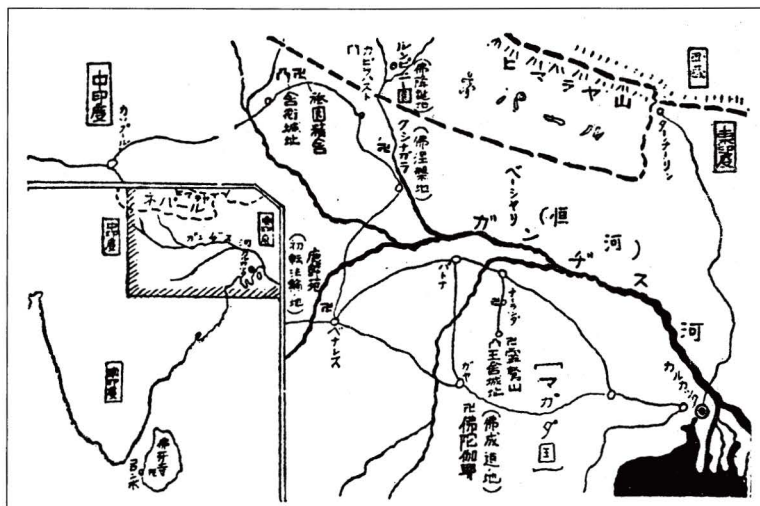


跡 舎 精 園 祇
 千年の夢を地中に埋めたる遺跡とは名ばかりの
 祠が一つ。

世尊ご一代にきわめて因縁深かりし精舎、舎
 祇衛三億といわれし衆生済度に三業説法し給いし
 法門のかずかず、また威儀端然たる幾千仏弟子
 の行住坐臥がしのぼるる、至心礼拝に時を過し
 て、またもときし路を急がれた。

（註―仏誕生地のネパール独立国は当時入国許可極

めて困難）



仏 蹟 略 図

カルカッタ

次に予定していたヒマラヤ山を見るダー
 チリン行きは風雨のため取り止めにし、首
 府カルカッタへの帰路に就かれた。異国の
 汽車にゆられ、ゆられる道すがら。

村山氏の案内にさし語らるる沿線のイン
 ドの風物、それも目新しいが不断称名の
 なか、国はかわつてもいつもかわらぬ念は
 常に弥陀願王のみふところに通う。汽車の
 窓に迫る熱帯林の濃緑の上にたたずむ白雲
 のささべり金色に輝いて、西に入る日のの
 こりの光に染め出され、青色には青光あり
 白色には白光あり、輝く万象は暉々燦爛。
 (いようかんらん)

その夕空を超越した心靈界に、世尊に反映した光の源、身色紫金の大慈父が至心一心に憶念さるる。

「西に入る夕日の方ぞ恋しけれわれをまちますほとけいませば」

かりそめの仮りの旅寝の夢ではない、一生生活の事実をもつて世尊のみあとを踏み進まんと、自覚々他の誓願金剛のごとき一仏乗の旅枕。

「世を捨てゝ梢をいとうこのみにも華さく春のこゝろともがな」

即今当念、念弥陀三昧の仏道につきつめた心は、インドにあつても等しくつきつめた平常心にかわりはなく

「世を秋の梢をいとうこの身には夜のあらしをまたぬばかりぞ」

一月三十一日にカルカッタに帰着、ダンマパーラ師のマハ（大）ボデ（菩提）ソサイテ（会）ホテルの一室を借り当分ここにおちつかれた。市では博物館に通い仏教芸術の遺品など写しとられた。（同師は明治二十六年日本に再来朝せり）

「たらちねの親のふるさと訪いくればおのれをつげていう人もなし」

ダンマパーラ師より師が多年尽力するブツダガヤ回復運動の名誉会員に推挙された。がこの



聖者印度僧服の御肖像（明治28年37才）

経済的解決の方には乗り気にはならなかった。

滞在五十日のインド見聞に、仏世尊の智の命を盛る日本人たる血の命が法衣につつまむ三十七歳の五体にも脈を打つ。

「から国のから山みても敷島の大和心はわすれざ

りけり」

遙かに思いやれば日清戦争、二十八年一二月のことである。仏蹟に帰命巡礼する自覚の旭にも、旭のみ旗が思われて、光明日本、旭日東天の祖国の威力に、さらにもう一つ精神の旭の光も祈願さるる。

「久方の雲井へだてゝあさ日かげさすがに国はわすれざりけり」

あなたは船の出入り繁きカルカッタ市の賑かな町景色。ホテルの庭には芝の葉裏に、つらなる命の親しみ深き小虫一匹、

「水こしの目にもとまらぬ小虫まで三世の仏のかずにはもれじ」



印度神祇志之記 佛地神影

出山の釈迦

帰 航

インドでは脚氣がやや悪くなられた。

また馴れぬ異国の大量の肉食で、腸を痛められたことも一二度あった。が翌日の旅程にはさしつかえなかった。

二月二十六日村山氏の旅費もたすけられ、同氏を伴ってフランス船で帰国の途につかれた。

ラングーン

船が寄港したラングーンでは上陸、有名な黄金塔の大涅槃像に参拝された。

道すがら日本人楼主の請に応じて、同地の日本遊女屋にたちよられ、貧なればこそ親のため千里の外の異国に苦勞して夢寐にも故郷を恋しがる、世に卑められた同胞の女子たちに、なごやかな父のごとき慈愛を含んだ言葉をかけ、情け深い如来様のおじひを説いて聞かせられた。獣の中で父に会いし思いをなした皆々の心からの晚餐の供養を受け、皆の惜む別れをつけて船に歸られた。

シンガポール・ホンコン

シンガポールでは日本人旅館に一夜を投宿、領事館に斎藤領

事を訪ね、書記手島氏（後に大毎記者）の親切な案内によつて市中を見物された。また熊本医学
校を卒業した医師ら人々の歓迎をうけて滞在三日の後、サイヤム立ちよりは船の都合で止め、
ホンコンに向われ、ホンコンの領事館で李鴻章氏にも会われた。上海では上陸せず、それから
日本に向う途中、欧州人が黄色人輕侮の常習から二人に同席を拒むので村山氏は沸然として抗
議すると、欧州人は今や鉄拳にも及ばんとするのを、船長の仲裁で事なきを得た。いつも温順
な上人がこの時は断乎として日本人輕侮を排する威力を示された。インド以来しばしば異国の
大量な食事にあてられたにもかかわらず、例の通り船の食堂にて洋人にはさまり、洋人に劣ら
ぬ肉類の健啖ぶりを發揮された。船中はいつもニコニコとして一点の邪気もへだてもなく、欧
州人に絵や細字を書き与えたりして、彼らと一緒に親しみ興ぜられていた。

帰朝

明治二十八年（一八九五）三月下旬帰朝、神戸より京都にいき、しばらく滞在された。

記念尊像

ブツダガヤよりもち帰りし土を混じて、数千体の（縦三寸横二寸ばかり）の
釈尊像を造りて、上人に帰依厚かりし陶器師河合瑞豊氏の手で焼き、これを京
都では浄土宗各本山を始め、禅宗東福寺、日蓮宗本圀寺その他の各宗本山、および有縁の各宗
寺院に参詣して奉納し、また奈良におもむき東大寺、西大寺、興福寺等各本山に巡拝して奉納
し、その他有縁の在家にわかち、多数は関東にもち帰りて、あまねく全国の有縁に寄贈された。
またブツダガヤおよび鹿苑の古塔煉瓦をもち帰りしを細末にして、釈迦三尊像に薄く色をつ
けた一寸五分に一寸ばかりの和紙印画を幾千枚となく作つて有縁にわたれた。